

「旧約の信仰者たちの手本」の「族長時代以前」(11:4~7)

■ヘブル人への手紙の構成

二つの主要な区分	内容	箇所	警告
第一区分： 神学的理論を中心に (適用としての警告 も含む) <u>ユダヤ教の三本柱</u> と 御子との比較	テーマ	1:1~3	
	<u>天使たち</u> に優る御子	1:4~2:18	警告① 2:1~4
	<u>モーセ</u> に優る御子	3:1~6	
	第二の警告	3:7~4:13	警告②
第二区分： 適用(御子の優位性を 理解した上での、信者 の歩み)	<u>アロン</u> に優る御子 (レビ族アロンの家系の祭司 職に優る御子)注①	4:14~10:18	警告③ 5:11~6:20
	勧めのための2つの基盤と4 つの勧め、警告、励まし	10:19~39	警告④ 10:26~31
	旧約の信仰者たちの生き方を 手本とする	11:1~40	
	信仰を持ち続けることの勧め	12:1~29	警告⑤ 12:25~29
	まとめとしての勧め	13:1~25	

注① レビ族アロンの家系の祭司職 ⇒ 以下、「レビ系祭司職」

■「旧約の信仰者たちを手本とする」11章の構成

細目	内容	箇所
信仰の忍耐	信仰の特徴	1節
	このような生き方が可能であることを実証した人々がいる	2
	目に見えないものを確信する事例=天地創造	3
族長時代以前	アベル	4
	エノク	5~6
	ノア	7
族長たち	アブラハム	8~19
	イサク	20
	ヤコブ	21
	ヨセフ	22
荒野の旅	モーセの両親	23
	モーセ	24~28
	イスラエル民族の人々	29~30
	ラハブ	31
試練の中で	イスラエル国史に見る信仰(士師たち・王たち・預言者たち)	32~34
	信仰は死を乗り越える	35~38
信仰の勝利		39~40

■ 前回の内容 「旧約の信仰者たちの手本」の「族長時代以前」① (11:4~6)

手本となる生き方	内容	箇所
神の定めた方法によって、神に近づく	アベル (創 4:2~8、マタ 23:35)	4
神のことばを伝える。世からは拒絶される。しかし、神との交わりの中に憩う=神と共に歩む、神に喜ばれる	エノク (創 5:21~24、ユダ 14~15)	5~6

1. アベル (4節)

(1) 信仰によって、彼は、カインよりもよりすぐれた犠牲をささげた。

① カインは、「地の作物」(創 4:3) を持ってきた。

② アベルは、血の犠牲、「羊の初子の中から最上のもの」(創 4:4) を持ってきた。

- これが神に受け入れられたということは、神が要求したものだから。
- 神の定めた方法によって、神に近づいたから。

(2) 創世記 4:2~8 → 3節「ある時期になって」

① 原文を直訳すると、「ある一定期間の終わりに at the end of days」

② 次の2点が示されている。

- days 定期的に繰り返される、ある一定の期間があったこと
- at the end その期間の終わりの日に、捧げ物をしていたこと

③ 4:3 で記録された出来事は、捧げ物をするという点では、初めてのことでない。ある一定の期間が終わるごとに、繰り返されていた。

④ 今回初めてのことは、カインの捧げ物が受け入れられなかったこと。ということは、それまではカインも血の捧げ物をささげていたはずである。

⑤ カインは、今回初めて、羊をアベルから買わずに (作物と交換せずに)、自分で何を捧げ物とするかを決めて、地の作物を持ってきた。

(3) カインとアベルの対比

① カインは、神に近づくための道・方法は、自分で決められると考える人のタイプ。

② アベルは、神に近づくには、神が定めた道・方法を選ぶ人のタイプ。

(4) マタ 23:35 義人アベル

① 血の犠牲がアベルを義人にしたのではない。

② アベルを義人にしたのは、「神が言われたとおりに、血の犠牲を持っていったときだけ、神に近づくことができる」と信じた信仰である。

③ その信仰を、実際に血の犠牲をささげることを通して表明した。

④ その表明によって、アベルは、自分が義人であることの「証人を得た」

⑤ 真の証人は、神である。神がアベルのための証人となってくださり、「神が、彼のささげ物を良い捧げ物だとあかししてくださった」(ヘブル 11:4)

(5) アベルの生き方と私たち新約の聖徒との関係

① キリストが十字架上でご自身を捧げられたのは、動物の犠牲よりもすぐれた、

そして最終的な、一つの永遠の犠牲である（ヘブル 10：4～18）。

- ② 私たちは、キリストにあって、神に近づくことができる者である（ヘブル 10：19～22）。
- ③ 紀元 30 年の聖霊降臨・教会誕生以来、これ以外に神に近づく方法はない。「この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです」（使徒 4：12）。
- ④ 「神の定めた方法によって、神に近づく」という生き方をしたアベルは、私たち、新約時代の信仰者にとっても、重要な手本である。

2. エノク（5～6 節）

(1) 5 節

- ① エノクは、神に喜ばれる生き方を通して信仰を表明した。
- ② 信仰によって、エノクは死を見ることのないように移された。

(2) 創世記 5：21～24

- ① エノクは、神とともに歩んだ。
- ② 神が彼を取られたので、彼はなくなった。

(3) 「取られた」について

- ① II 列 2：10～11 10 節「取り去られる」同じヘブル語が使われている
- ② I テサ 4：17 「空中に引き上げられ」
- ③ I コリント 15：52 復活と変換
 - 死者は朽ちないものによみがえり・・・復活
 - 私たちは変えられる・・・・・・・・・・変換

(4) エノクは、「変換」を受けて、天に引きあげられた最初の人

- ① 次は、エリヤ（II 列 2：11）
- ② 三回目は、I テサ 4：16～17。
 - いつか？ 「キリストにある死者」が復活するとき（I テサ 4：16）
 - 誰が？ 「地上で生き残っている私たち」。「復活」ではなく、「変換」を受けて天に引きあげられる（I テサ 4：17）。

(5) I テサ 4：17 の「天に引き上げられること」（携挙）について

- ① I テサ 4：16～17 で、信者たちは、復活にせよ、変換にせよ、朽ちない栄光の体を受けて、天に引き上げられる。これを「携挙」と呼ぶ。
- ② 「復活」を受ける人々＝「キリストにある死者」（I テサ 4：16）・・・「キリストにある」という地位は、新約時代の聖徒の地位である。
 - 信仰を通し恵みによって救われ、同時に聖霊のバプテスマを受けて、目に見えない・キリストの体である「教会」に属することとなった信者である。時代としては、紀元 30 年の聖霊降臨以降。
 - この地位は、旧約時代の聖徒にはない。また、真の教会が携挙された後、【7 年の患難期と千年のメシア王国】の時期に信じて救われるであろう信者たちも、この地位にはあずからない。
 - よって、ここでの復活は、新約時代の聖徒だけが対象である。
- ③ 「変換」を受ける人々＝「地上で生き残っている私たち」（I テサ 4：17）・・・この信者たちは、旧約時代の聖徒たちではなく、明らかに新約時代の聖徒たちである。

- ④ 携挙にあずかる信者たちは、復活のグループも変換のグループも、ともに、新約時代の聖徒たちである。携挙は、目に見えないキリストの体である「教会」に属する信者たちだけが対象である。よって、「教会の携挙」と呼ぶこともある。
- (6) 「携挙」と「再臨」の関係
- ① 携挙のとき、主イエス・キリストは、ご自身天から下って来られて空中で、教会の信者たちを迎えてくださる（Iテサ4:16）。
- ② Iコリ15:23では、このときを「キリストの再臨のとき」と表現している。
- ③ 携挙の時点では、キリストは天から下って来られるが、地上に降り立つことはない。
- ④ キリストが地上までお帰りになるには、条件がある。
- 条件「イスラエル指導者層と民族全体がイエスをメシアとして認め、民族的な救いを受けて、イエスに帰って来てくださいと祈ること」
 - ホセア5:15、マタイ23:39
- ⑤ イスラエルの民族的救いとそれに続くキリストの地上への再臨は、大患難期の末期に起きる
- ホセア6:1~3
 - ミカ2:12~13
 - ハバクク3:3、13
 - イザヤ63:1~6)。
- ⑥ Iコリ15:23が、携挙を「キリストの再臨」の中の出来事として位置づけている理由は、ユダの手紙14節から明らかとなる。(7)で詳しく見る。
- キリストが地上に再臨するときには、彼に属する聖徒たちを同行する。
 - キリストの再臨に同行する聖徒たちを招集するのが、携挙である。
- ⑦ 再臨には④の条件があるが、携挙については、条件はない。紀元30年の教会誕生以降、いつでも起こり得る。
- 「異邦人の完成のなる時」（ロマ11:25）、すなわち、教会に属する異邦人信者の数が、神がお定めになった数に満ちたときに、携挙が起きる。
 - その時がいつかは、父なる神以外の誰も知らない（使徒1:6~7、ここでは、携挙は、再臨とそれに続くメシア王国の建設につながる出来事として語られている）。
- (7) ユダの手紙14~15節
- ① エノクは、アダムから7代目
- ② エノクの預言、「主は千万の（彼に属する）聖徒たちを連れて来られる」
- ③ 主が来られる＝主イエス・キリストの再臨
- ④ 千万の（彼に属する）聖徒たち＝携挙によって天に引き上げられたキリストにある聖徒たち＝新約時代の聖徒たち
- ⑤ 15節 主の再臨の目的＝三つ組
- すべての者にさばきを行う・・・この組の他の二つから「すべての者」とは、不信者すべてを指し、信者は含まれないことは明らかである。
 - 不敬虔な者たち（神なき者たち＝不信者）が行った神なき行為のすべてを罰する。

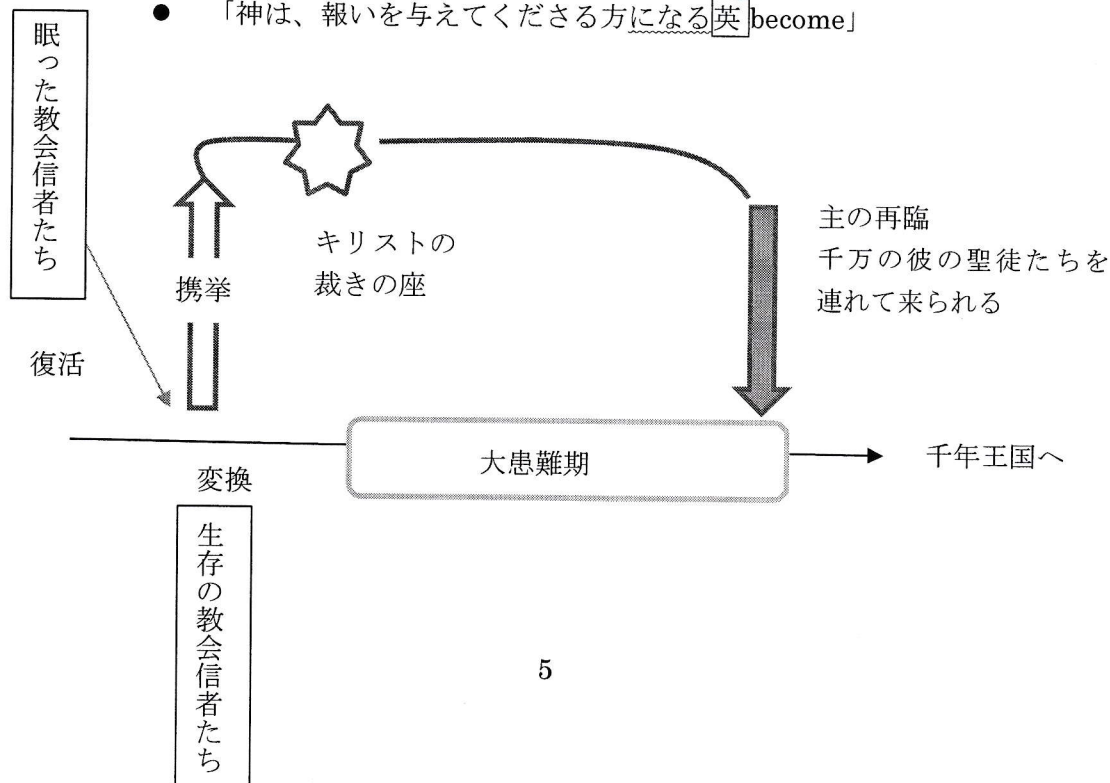
- 神なき罪人たちが主に言い逆らった無礼のすべてを罰する。
- ⑥ エノクは預言者であった。
 - エノクは、神のことばを受けて、世に伝えた。
 - 世の反応は、「神なき者たち」(不信者たち)からのいろいろな行為やことばによる攻撃。また、人の目からは立派な行為であっても、神に対する信仰がなければ、それも神なき行為に含まれる。
 - そのような状況の中でも、エノクは300年間、「神とともに歩んだ」(創世記5:22)

(8) 歩む へ ハウラク

- ① 創3:8で、神がエデンの園を「歩き回られる」と同じことば。仲間、友達付き合い、交流、といった意味を含む。
- ② エノクは、神と交わりをもっていた。
 - 信仰を通して恵みによって救いを受けていた。
 - 神のことばを喜び、人々にそれを伝えた。彼は預言者として、信仰による義を教えた。しかし、世の反応は、神なき行為やことば、すなわち不信的な行為やことば。
 - エノクは、その状況の中でも、300年間、神との交わりの中で、礼拝し、祈り、そこから平安と慰めと力を受け続けた。自分の能力や意志に頼る人生ではなく、神とともに歩む人生であった。
 - この生き方が、神に喜ばれる生き方である。

(9) ヘブル11:6 「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」という原則

- ① エノクは、神に喜ばれた。それは、エノクに信仰があったからである。
- ② 神に近づこうとする者は、二つのことを信じなければならない。
- ③ 第一：神が存在するという事
 - これは信仰への第一のステップである。
- ④ 第二：神を求める者には、神は報いてくださる方であること。
 - 「求める」 ギ エクゼテオウ=真剣に求める、探し出す
 - 「神は、報いを与えてくださる方になる」 英 become



■ 今回の内容 「旧約の信仰者たちの手本」の「族長時代以前」② (11:7)

手本となる生き方	内容	箇所
神の命令に従順に従う 世を罪に定める	ノア (創 6:1~22、Ⅱペテ 2:4~5)	7

1. ノア (7節)

- (1) ノアは、神から警告を受けた。それは、まだ見ていない事がらについてであった。
- (2) しかし、ノアは、神を恐れかしこみ、その信仰によって、箱舟を造った。
- (3) その結果、彼の家族は助かった。
- (4) ノアは、世の罪を定めた=彼の生き方と証しは、他方でそれを嘲り笑う人々の不信仰を明らかにした。
- (5) ノアは、信仰による義を相続する者となった=神はノアをその信仰によって義人であると認めてくださった
- (6) ノアは、信仰の従順、または信仰によって神に従うという生き方の手本である。

2. 創世記より

- (1) ノアは、どういう警告を受けたのか (6:17)
- (2) 神は、なぜ大洪水のさばきを地上にもたらそうとしたのか (6:13、6:1~7)
- (3) 墮天使たちが、人間の女と雑婚した目的は何か。墮天使たちは、その後、どうなったのか (3:15、Ⅰペテ 3:19~20、ユダ 6)
- (4) ノアは、洪水を見たことがなかったのか (1:6~7、2:5~6)
- (5) 神は、ノアにどのような命令を与えたか (6:14~16、18、19~21)
- (6) 箱舟の建造期間は、何年か (6:3)
- (7) ノアは、自分で動物たちを集めたのか (7:8~9)
- (8) ノアは、自分で箱舟の入り口を閉じたのか (7:16)
- (9) ノアは、自分で箱舟を操縦したのか (7:18)
- (10) ノアとその家族は、どのくらいの期間、箱舟にいたのか (7:4~11=第二の月の10日、8:14=第二の月の27日、1年と18日=360日+18日=378日、7の倍数)
- (11) ノア契約の内容と、そのしるしは何か (9:1~17)
- (12) ノアの3人の息子、セム、ハム、ヤペテ。ノアの預言では、彼らの特徴は何か (9:20~27)
- (13) 人類最初の権力者ニムロデは誰から出たか。ニムロデが建てた町は? (10:6~12)
- (14) 人類の諸民族は、3人の息子たちからどのように分かれていったか (10章)
- (15) バベルの塔の事件とはどういう出来事か (11:1~9)
- (16) 人類が異なる言語で分かれ、諸国家が分かれて互いに一致することのないことは、神の計画の中ではどのような意義があるのか (11:6、使 17:26~27、申 32:8)
- (17) バビロンは、その後の歴史の中で、どういう役割をはたしてきたか (ダニ 1:1~2、2:31~45)
- (18) バビロンは、来るべき7年間の患難期においてどのような役割を担うのか (ゼカ 5:5~11、黙 17:1~18、18:1~24、イザ 13:1~3)
- (19) 日本人は、セム、ハム、ヤペテ、どの系統に属するのか (10:15~18)

3. 神の子ら (創 6:2)
- (1) 旧約聖書での用法
- ① 神の子ら
- ヨブ 1:6、2:1
 - ヨブ 38:7
- ② 力ある者の子ら
- 詩 29:1
 - 詩 89:6 (5節と7節の「聖なる者たち」は、聖なる天使たちを指す)
- ③ いと高き方の子ら
- 詩 82:6
- (2) BC250年頃のギリシヤ語訳聖書(七十人訳)では、「神の使いたち」と訳された。
4. わたしの霊は、永久には人のうちにとどまらないであろう (創 6:3)
- (1) わたしの霊=聖霊なる神
- (2) とどまる
- ① このヘブル原語が旧約聖書の中で使われているのは、ここの1回のみ
- ② デイン(又はドン)の派生語とするか、ドナン(ドナン)の派生語とするか、で2通り
- デイン⇒支配する、法を守る、審判する、奮闘する→聖霊は、人々の間で働いて罪を抑制しておられる(エノクやノアによる預言や宣教を通して)が、それをやめると警告になる
 - ドナン⇒とどまる→聖霊は、人にいのちを与える霊(創 2:7)であり、いのちの霊が離れるということは、死ぬという警告になる。
- (3) 永久には・・・神は、創 6:2に記された罪の中にある人類に、ずっと存在し続けるようなことは許さない。
5. ネフィリム (創 6:4)
- (1) 複数形。単数形はネフィル。ヘブル語の「ナウファル」(落ちる、墮落する)からの派生語で、ネフィリムとは「墮落した者たち」という意味。
- (2) 彼らは墮落し、地上に悪が増大する状況をもたらした (創 6:5)
- (3) 「背の高い強い人」を意味するヘブル語は、「レファイム」(申 2:11、20、3:11、3:13、ヨシュア 12:4、13:12)
- (4) 民数記 13:33、10人の斥候たちがカナン人の地を偵察して「ネフィリムを見た」と言ったのは、偽証。
- (5) ヨシュア記にはネフィリムに関する記事は全くない。
6. またその後にも (創 6:4)
- (1) 4節のヘブル語原文を語順にそって、直訳すると次のようになる。

ネフィリムがいた、地上に、その当時。
 まさにその後である、(どの時点から後かと言うと)
 神の子たちが人の娘たちのところに入り、彼らに子どもができた時。

- (2) 4節は、洪水前にネフィリムが存在したという事実について、それが2節の雑婚によって生まれた種族であるということを説明している。そのような異常な種族の存続を神は許さず、「洪水」につながる(5~13節)。